

エペソ人への手紙4章7節 「キリストの恵みの贈り物」

1A 恵みによる一致

1B キリストの賜物

2B キリストの量り

3B 召しの望み

2A 賜物による多様性

1B もうひとりの助け主

2B 一人ひとりに対する贈り物

3B その分に応じる働き

本文

エペソ人への手紙4章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、エペソ3章まで来ていました。午後礼拝で、4章の前半1節から16節まで一節ずつ見ていきます。今朝は、7節に注目します。「4:7 **しかし、私たちは一人ひとり、キリストの賜物の量りにしたがって恵みを与えられました。**」私たちは今朝、キリストによって与えられた恵みと、その恵みの具体的な現われである賜物について学んでいきたいと思えます。

私たちはこれまで、エペソ人への手紙で、パウロが、キリストにある神の豊かな恵みについて見ました。神が私たちを一方向的に愛しておられて、好意を寄せておられて、キリストにあってあらゆる霊的な祝福をくださいました。そのように私たちが、神の豊かさにあずかるようになり、次に私たちは、それを感謝の心をもって分かち合いたいと願います。それを賜物と呼びます。賜物と訳されている新約聖書の言葉に、「カリスマ(charisma χάρισμα)」があります。これは恵みのギリシア語「カリス(charis χάρις)」から来ています。神の恵みをいっぱい受けたから、そこにある贈り物です。

そして私たちは、持ち寄りという習慣がありますね。英語で言うならば、ポットラック(potluck)です。みなで共に、神の恵みを感謝して受け取るために、一人ひとりに与えられているもの、その能力を用いて、一品料理を持って来ます。それは自分が食べるものではなく、他のみなさんが食べるものです。そのようにして、みなでそれぞれが与えられているものを分かち合うことによって、一体感を味わうのです。これが、カリスとカリスマの分かりやすい例えです。神に与えられた恵み、カリスがあります。そして、その与えられた恵みを互いに分け合うことによって、神の恵みを一層のこと知っていきます。その分け合う時に、自分の持ち合わせているものが賜物、カリスマです。

1A 恵みによる一致

パウロは、キリストが、ご自分の恵みを与えるために、賜物によって与えることを、詩篇 68 篇に

ある言葉を引用しています。8 節が、その引用です。「そのため、こう言われています。「彼はいと高き所に上ったとき、捕虜を連れて行き、人々に贈り物を与えられた。」これは一体、どういうことなのか？これは、コリント人への手紙第二でも学びましたが、戦いに勝った将軍が凱旋の行列で都に入る時に、捕虜を見せ物として引き連れられます。そして、一般の人々には贈り物を配るのです。

そこで思い出すのは、ダビデがアマレク人と戦った後に取った行動です。共に戦った者たちにも、また途中で脱落した兵士たちにも、等しく、アマレク人からの戦利品を等しく分け与えたことです（I サムエル 30 章）。サムエル記第一の最後のところに書いています。ダビデは、自分を殺そうとするサウルから逃げる生活を送っていました。それに疲れたからでしょう、サウルの追ってくることのできないペリシテ人の領主アキシユのところには彼は部下と共に渡って行きました。イスラエルの敵のところに行ったのです。これは、物理的にサウルから守られますが、信仰的には後退しています。敵のところにいるのですから、イスラエルに敵対しないといけません。彼は、ツィケラグという町が与えられました。そこからアマレク人の町々を襲いました。けれども、ユダのこれこれの町を襲って来ましたといって、アキシユには伝えたのです。

そして、ついにサウルとの戦いにペリシテ人が出て行こうとしました。ダビデは何と、自分たちも戦いますと進んで願い出たのです。もしこれがかなえられたら、ダビデたちは同胞イスラエル人たちを殺すことになります。けれども、他のペリシテ人の領主たちが、ダビデを信用できず、戦いに加えるのを拒みました。それでダビデたちはツィケラグに戻りました。すると、アマレク人たちが、妻たちも、子供たちもすべて連れ去られていたのです。それでダビデと一緒にいた兵士たちは嘆き悲しみ、あまりにも絶望したので、ダビデさえ石で打ち殺そうとまで言い始めました。その時に、「ダビデは自分の神、主によって奮い立った。(30:6)」とあります。彼は我に返って、主によって奮い立つことができました。それでアマレク人たちを追跡するのです。途中、倒れていたエジプト人の情報で、彼らがどこにいるか分かりました。しかし、疲れ切って途中断念した者たちもいました。600 人のうち、200 人がそこに荷物の番をしたのです。残りの 400 人で戦いに行ったら、アマレク人たちがお祭り騒ぎをしていました。そこで、ダビデたちは彼らを討って、見事に女子供、すべてを取り戻すことができました。

ダビデは、そこで思うのです。彼は、とんでもない過ちを犯していました。ペリシテ人を自分の主にして、神に対して不誠実だったのです。それにも拘らず、主は憐れんで下さり、すべての妻と子供たちを取り戻すことができるようにしてくださったのです。この恵みがあるから、途中で脱落した兵士たちと、アマレク人たちと戦った兵士たちとの間に違いはありません。この戦いは、主の恵みによって勝たせてくださったからです。だから、その恵みを差別なく分かち合わないといけない、としたのです(24 節)。そして、この後、サウルが死んだのでダビデが、イスラエルで唯一の王となっていくます。

1B キリストの賜物

これが、キリストの姿を示しています。キリストが、十字架につけられ、三日目によみがえられ、そして天に昇られました。そして、勝利されたキリストは、聖霊の賜物をそれぞれに分け与えられたのです。凱旋した王が、その市民に贈り物を配ったように、アマレク人との戦いで戦利品を、兵士たちに等しく分け与えたように、王なるキリストが、ご自分のものたちに聖霊の賜物を分け与えてくださったのです。

ですから、ここには恵みがあり、恵みがあるところには一致があります。だれがどれだけできたか？という比較はないのです。そこには、へりくだりがあり、誰がどれだけ成果を上げたかというような競争はないのです。だから、平和があります。恵みは、人々に一致を与えるのです。恵みのあるところには、キリストの御業が敬われます。この方によって、救われたという喜びがあります。その感謝があります。だから、どの国の人であっても、私たちは同じ思いを持つことができます。身分が異なっても、同じ思いを持つことができます。みなが同じところに立っているからです。神の恵みによって救われたのですから。

2B キリストの量り

そして、「**キリストの賜物の量りにしたがって**」とありますね。パウロは、似たようなことをロマ書 12 章でも話しています。「12:3 私は、自分に与えられた恵みによって、あなたがた一人ひとりに言います。思うべき限度を超えて思い上がってはいけません。むしろ、神が各自に分け与えてくださった信仰の量りに応じて、慎み深く考えなさい。」

キリストが私たちにくださった恵みがあります。キリストが愛してくださいました。その恵みによる愛が、量りとなって、私たちが互いに愛するのです。恵みに対して、感謝して、それでキリストが愛されたように、愛するということです。キリストが、私たちの分かち合うことの基準となっている箇所が数多くあります。「Iヨハ 4:19 私たちは愛しています。神がまず私たちを愛してくださったからです。」「Iヨハ 3:3 キリストが清い方であるように、自分を清くします。」エペソ 5 章には、キリストが教会を愛されたように、夫が妻を愛しなさいとあります。神がキリストにあって示してくださった恵みがあり、その量りに従って、私たちが賜物を与えられているのです。いうなれば、私たちは、互いにリストを分かち合うと言ってよいでしょう。だから、交わりが必要なのです。交わりによって、自分恵みによって与えられたキリストがおられて、この方を知っていくのです。

3B 召しの望み

ところで、エペソ 4 章前半は、「召しにふさわしく歩みなさい」ということですが、その召しとは、キリストの下で一つになるということです。エペソ 1 章から 3 章までに出てきたテーマです。そこで 4 章 4-6 節に、召しの望みが一つであることが書かれています。召しの望みとは、神の御国をキリストにあって受け継ぐことですね。その望みは一つなのだよ、と言っています。私たちが、神の恵み

によって救われたからには、そのすべての人が等しく、天に入ることを知らないといけません。ある人が、自分の嫌いな人が入らず、好きな人たちだけが入るのではありません。天において、また神の国において、自分の仲間とそうでない人たちの間に隔ての壁は建てられていないのです！同じ、御国なのです。そして、そこには、「あれっ、お前もいたの？」と驚く人がいるでしょう。逆に、「あれっ？あれだけ有名な人なのに、実は御国から外されていたの？」と驚くこともあるでしょう。神の恵みは、後の人を先にし、先の人を後にしますから。

そして、からだは一つとありますね。あの人たちは、違うからだということはできません。同じキリストのからだで、つながっているのです。それから、御霊が一つです。私たちが受けている霊は、特別な霊で、あの人たちは異なる霊を受けているということはないのです！そして、5 節には、主はひとりとあります。あの人はイエスを信じていると言っているが、私たちは異なるイエスを信じているとすることはできないのです。信仰は一つ、バプテスマは一つなのです。教団や教派によって、異なる信仰を持っていて、異なるバプテスマを受けているから、だから私たちの教派に入る時は新たに信仰告白とバプテスマを受けなさいというのは、本来、あってはならないことです。同じ信仰を持っていて、同じ、イエスの御名によるバプテスマを受けているのですから。そして 6 節ですが、もちろん、父なる神は一人です。

2A 賜物による多様性

このように、恵みによって私たちは一つになっています。けれども、キリストの賜物はそれぞれ異なっています。異なっているからこそ、恵みによって一つになっていることがさらに意識されるのです。キリストのからだは一つだけれども、各器官が異なっていて、そしてその異なる器官が相ともに働いて、それで一つのからだ機能がします。多様性の中の一致なのです。ジョン・ストットという教会の指導者が、その著書の中でこう言いました。「教会はその統一性をカリス(恵み)に負っているが、その多様性をカリスマ(賜物)に負っているのである。」

私は、自分一人で礼拝をしているので、もうそこが教会ですという人々に、とても深い疑いを持っています。もしかして、自分一人にすべての賜物が与えられているのでしょうか？自分は手だけでなく、足でもあり、鼻でもあり、耳でもあり、すべて与えられているのでしょうか？私たちは、一人ひとりがからだを運んでくることによって、そして恵みを分かち合うことによって、それぞれが異なるのですが、それを持ち寄ることによって、初めて一つのキリストのからだを知ることができるのです。いろいろな賜物があつてこそ、一つのキリストの賜物を知ることになります。教会から離れて、キリストの恵みを知ることは不可能です。

1B もうひとりの助け主

主が凱旋され、神の右の座に着いておられますが、その時に私たちに与えられた戦利品は、聖霊ご自身です。イエス様は、もうひとりの助け主を送られる約束をくださいました。そして、ペテロは、

福音のことばを聞いて心刺された人々にこう言いました。「使 2:38 それぞれ罪を赦していただくために、悔い改めて、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けます。」聖霊が与えられることによって、私たちはキリストご自身が共にいてくださることを知ります。しかも、それはすべての信者に共にいてくださるという恵みなのです。主は、肉体をもって来られたので、すべての人に一度に共にいることはできませんでした。けれども、聖霊はすべて信じる者に与えられるので、聖霊によってイエス様は私たち一人ひとりに、すべてに共にいてくださいます。

2B 一人ひとりに対する贈り物

そして、聖霊は、それぞれに、他の人々に恵みを分かち合うための力を与えておられます。それが、ここでパウロが、「**私たちは一人ひとり**」と敢えて書いている理由です。一人ひとり、異なる賜物が与えられています。「I ペテ 4:10-11a それぞれが賜物を受けているのですから、神の様々な恵みの良い管理者として、その賜物を用いて互いに仕え合いなさい。語るのであれば、神のことばにふさわしく語り、奉仕するのであれば、神が備えてくださる力によって、ふさわしく奉仕しなさい。すべてにおいて、イエス・キリストを通して神があがめられるためです。」

一人ひとりに恵みが与えられているのですから、その賜物があるのですから、その力に応じて、互いに仕え合います。それによって、初めて知る恵みがあるのです。キリストを知るのです。どうですか、今、読んだ第一ペテロには、「語るのであれば、神のことばにふさわしく語り」とありますね。私が、教える者でその賜物を用いることによって、みなさんは、私のことを知りますか？いいえ、キリストを知るのです。キリストの恵みを知るのです。そして知ってください、語るだけでなく、奉仕することによっても、キリストを知るのです。言葉でなく、具体的な行いによって、みなさんがいい人だとか、気前のいい人だとか、ではなく、キリストがここにおられると知るのです！

東日本大震災が起こり、間もなくして、カルバリーチャペルの仲間がそれぞれが示されて、被災地に行こうとしていました。その時に、私はメールを受け取りました。「神は、なぜこのようなことを許されるのか？神は、津波の災害でどこにおられるのか？」私は、確か次のように答えたと思います。「キリスト者が、被災された方々と共にいることによって。」であります。キリスト者がそこに行くことによって、キリストの愛を分かち合うことによって、神が災いの時に共におられることを知るのです。事実、多くのクリスチャンたちは、地元の人々に「イエスの人たち」という呼び名をもらいました。神というと、彼らも神仏があります。けれども、仏教も神道も至る所にあったのに、具体的に助けたのは、圧倒的にキリスト者たちだったからです。いろいろな神と分けるために、「イエスの人たち」と分けたのです。

このように恵みを、それぞれ与えられている賜物によって分かち合うのです。

3B その分に応じる働き

そして、大事なものは、その分に応じる働きなのだということです。16 節に、「それぞれの部分がその分に応じて働くことにより成長して、愛のうちに建てられることになるのです。」とあります。それぞれが異なる働きをしています。けれども、異なるからこそ互いにつながっていることを意識します。しかし、互いにつながっているのですが、指令はかしらから、キリストご自身から来るのです。それぞれが、キリストによって召されて、それぞれの働きがあります。その分を行っていくことにより、からだ全体が機能するのです。

私たちが、しばしば行ってしまう過ちは、他の人たちと比べることです。そもそもが異なっているのです、比べるのは無意味なこと。それぞれが、主から言われたことに忠実に仕えていく必要があります。言われたことが何なのか？が大事です。そして仕える相手は、イエスご自身です。人々に仕えているのですが、本質的にはその人々に仕えなさいと命じておられるイエス様ご自身を主として、仕えているのです。だから、すべてをしなればいけないと思うことも、過ちです。自分が手なのに、足の働きができますか？足に任せる必要があります。同じように、足の人 hands の働きをすることはできません。主が何と言われているかをわきまえ知ることにより、みなの手ばかりになるとか、足ばかりになるとか、そういうことがなくなるのです。それぞれがいたわりあって、それだからだ全体が機能します。

これでお分かりになったでしょうか、神の恵みにおいて私たちは一つになっています。けれども、賜物において、私たちは異なっています。そして異なる賜物を用いると、私たちが恵みによって一つであることが、ますます知っていくようになります。そうして、召しの望み、つまりキリストの下で一つになっていくという望みに向かっていくことができるのです。賜物を用いてください。賜物によって、互いに仕えてください。その中で、私たちのキリスト体験は何倍にも、豊かなものになります。

聖霊論についての言葉で、ジョン・ストットという著名な英国の福音派の指導者が、「今日における聖霊の働き」という著作の中でこう書いておられます。

「教会はその統一性をカリス(恵み)に負っているが、その多様性をカリスマ(賜物)に負っているのである」

(www.geocities.jp/ptl150/HolySpirit_Book.htm から引用)

It denotes the result⁶ of χάρις viewed as an action with no sharp distinction from this term:⁷ “proof of favour,” “benefit,” “gift.”¹

⁶ Schwyzer, I, 522: “Later fundamentally nomina rei actae (in contrast to -μός and -σις), they (sc. neuters in -μα) were already at an early stage terms for objects as well.” Acc. to Bl.-Debr. §109, 2 also derivatives in -μα usually denote the result of an action. But care is needed in the NT in spite of Bl.-Debr. §109, 2, where it is stated that baptism is βαπτισμός while βάπτισμα includes the result as well; this is too schematic.

⁷ G. P. Wetter, “Charis,” UNT, 5 (1913), 174: “As χάρισμα overlaps the field of χάρις, so does χάρις that of χάρισμα,” R. 15:15.

¹ Conzelmann, H., & Zimmerli, W. (1964–). [χάριω, χαρά, συγχαίρω, χάρις, χαρίζομαι, χαριτόω, ἀχάριστος, χάρισμα, εὐχαριστέω, εὐχαριστία, εὐχάριστος](#). In G. Kittel, G. W. Bromiley, & G. Friedrich (Eds.), *Theological dictionary of the New Testament* (electronic ed., Vol. 9, p. 403). Eerdmans.